

パーム油の生産現場をボルネオのアブラヤシ農園を訪ねる 尾崎 楓怜 (国際関係学科・学生)



はじめに

筆者は、現在、ゼミの研究テーマとして、ボルネオ島におけるアブラヤシ・プランテーションが引き起こす問題を取り扱っている。ここでは、ボルネオ島における森林減少の変移、パーム油の特徴、アブラヤシ農園開発によって生じる社会問題について論じる。

ボルネオ島の森林減少

ボルネオ島は東南アジア海域に浮かぶ島々の中でも一番大きな島である。この島には、マレーシア、インドネシア、ブルネイの三つの国が領土を有している。昨今、島の熱帯林が、エビを養殖するための池や、石炭の採掘、紙・パルプ用の植林木を生産するためのプランテーションなどの開発によって、急激な破壊と変化にさらされているが、特に、森林破壊の最大の要因の一つとなってきたのが、パーム油を生産するためのアブラヤシ農園の拡大である。

図1、図2は、1973年から2010年のボルネオ島の森林の変容を表している。濃い緑が原生林、黄緑が二次林/三次林、黒色がプランテーション農園、そして白が非森林で示されている。2つの図から約40年間で広大な範囲の森林が伐採されたことがわかるだろう。アブラヤシ農園開発は1970年代から盛んになり、農園の拡大のために日々森林が破壊されてきた。現在では、大資本の農園企業だけでなく、多くの現地の小規模農家がアブラヤシ農園開発に加わっている。WWFによると、過去半世紀のうちに急速に森が破壊され、現在までに50%が消失したと言われている。



図1:1973年の森林被覆の様子(Gaveau et al. 2014)

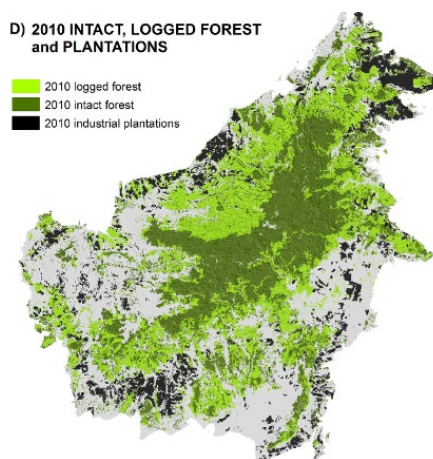


図2:2010年の森林被覆の様子(Gaveau et al. 2014)

パーム油とは

アブラヤシという木から採れる植物油をパーム油と言う。アブラヤシの木は熱帯地域でのみ生育し、さらに土壌から大量の水分を必要とするため、限られた地域でのみ生育する。毎年約7000万トン以上のパーム油が世界で生産されているが、そのうち52%がインドネシア、33%がマレーシアによって生産されている(図3)。パーム油が大量生産・大量消費される理由は、その高い汎用性と価格にある。パーム油は、固めても溶かしても使えるため、「万能な油」と言われるくらい、私たちの身の回りものに使用されている。また、他の植物油に比べて1ha当たりの土地から採れる量が多く、さらに年間を通して実をつけるため単位面積当たりの油の生産量が極めて高いことにより、価格が安い。

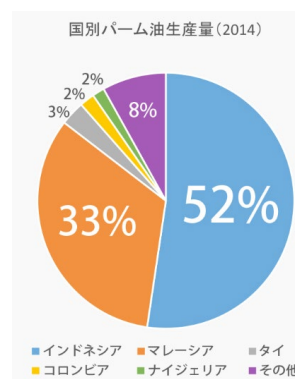


図3:国別パーム油生産量(熱帯林行動ネットワーク 2016)

以上で述べたように、パーム油は私たちの身の回りにあふれていることがわかるが、一般にはあまり知られておらず、「見えない油」とも言われている。なぜなら、商品の原材料名には「植物油脂」としか表示されていないからである(写真1)。したがって、パーム油の存在を知らない消費者が多いのだ。



写真1: チョコレートの原材料名(プランテーション・ウォッチ)

環境問題と社会問題

パーム油が生産されているボルネオの現場では大きな環境問題が引き起こされている。プランテーション農園の開発に伴って、森林が失われることはもちろん、熱帯林に隣接するように広がっている泥炭地もまた、アブラヤシ農園として開発されている。その際の深刻な問題が、火入れ作業により頻発している森林・泥炭地の火災である。インドネシアやマレーシアの森林や泥炭地の火災は、毎年、雨が少ない乾季(特に6月～10月頃)に多発するが、その原因の多くは新規農園開発の為に人為的に放たれた火だと考えられているのだ。水が抜かれて乾いた泥炭地は、非常に燃えやすくなっている上、雨季が来るまで完全に火災を消し止めることが困難であることから、大量の温室効果ガスの発生源となってしまう(写真2)。泥炭地は、地球の陸地面積のわずか3%を占めるにすぎないが、そこには世界中の森林を合わせたよりも多くの炭素が貯えられている。これが消失しているのである。



写真2: 泥炭火災の消火活動(WWF ジャパン)

さらに、このような開発や森林火災によって森林が減少するとそこに生息する動物たちが住処を失い、生物多様性も失われる。この島の熱帯雨林には多種多様な動植物が生息しており、生物多様性の宝庫と言える場所だ。しかし、残された森林は分断されているため、オランウータンは極限られた範囲でのみ移動することを余儀なくされている。なお、住処を失ったオランウータンが農園に侵入し、害獣として殺されたケースもある。

アブラヤシ農園の開発で被害が及ぶのは、森にすむ野生動物だけではない。森を利用して生きる先住民が、事前に農園開発の予定を知らされず住む場所を失い、土地紛争に発展するケースもあった。先住民たちは、狩りや農業などで自給自足的な生活をして暮らしているため、木々が失われ動物がいなくなると、今までのようには生きていけなくなるのだ。

さらに、アブラヤシ農園で働く人たちの児童労働や強制労働も重要な問題である。アブラヤシの木は、成長すると樹高が20m以上に成長し、高い幹の先端付近に実がなる。また、その果房は30kgほどの重さであるため、とても重労働である。そのような収穫作業に強制的に従事させられ、賃金が支払われないなどの問題が報告されている。このように、アブラヤシ農園開発では多岐にわたる重大な社会問題が生じている。



写真3: 企業によるアブラヤシ大規模農園(筆者撮影)

代わりに

インドネシアには、長期にわたって国際社会からアブラヤシ農園開発に伴って生じる社会問題について様々な批判が向けられてきた。しかし、その現場で生産されたパーム油を私たちは、日常生活において知らないうちにたくさん消費している。私たち消費者が知らず知らずのうちに購入したものが、まわりまわって生産国の環境を破壊し、様々な社会問題を引き起こす要因となっていることを認識し、今一度消費者としての責任について考え直す必要があると筆者は考える。

主要な参照・参考文献

- 熱帯林行動ネットワーク(2016)『パーム油調達ガイド』
- プランテーションウォッチ「あぶない油の話」(ホームページ <https://plantation-watch.org/abunaiaabura/>)
- WWF ジャパン(2014)「ボルネオ島の森林保全」
- WWF ジャパン(2019)「パーム油の問題とは?私たちの暮らしと熱帯林の破壊をつなぐもの」
- Putri, E. I. K. et al. (2022) “The oil palm governance: challenges of sustainability policy in Indonesia,” *Sustainability*, 14(3).
- Gaveau, D. et al. (2014) “Four decades of forest persistence, clearance and logging on Borneo”. *PLoS ONE* 9(7).